

沖縄の重箱

—重箱の現状からみる祖先崇拝儀礼の簡略化—

Okinawan Festive Food "Jubako"

-simplification of ancestor-worship rituals in case of Jubako.

人文科学系／文化研究／論文

地域キュレーションコース

桑江 可奈子

Kanako Kuwae

◎研究目的

本研究は、祖先崇拝の思想が根底にある沖縄の伝統的な儀礼の数々と、それらの儀礼のなかで用いられる伝統食の現状を明らかにすることを目的としたものである。

沖縄は、先祖を祖霊神として信仰する祖先崇拝の風習が今もなお色濃く残っている地域であり、祖先崇拝の思想からなる伝統的な儀礼が数多く存在する。しかし、沖縄出身である筆者は、沖縄での生活のなかで、そういった儀礼の数々が時代の流れとともに省略・簡略化されている様子を目の当たりにし、次第に沖縄の伝統的な儀礼の現状を明らかにしたいと考えるようになった。そこで筆者は、多くの儀礼のなかで用いられる沖縄の伝統食「重箱」に着目した。儀礼のなかで用意され、皆で食される食事、「重箱」に関しては、儀礼の要素として省略がなされにくく、変化が起こった部分については非常に分かりやすく観測できるものであるため、重箱について研究することは、儀礼の現状を明らかにするための足掛かりとなると考えたからである。本論は、祖先崇拝の思想に基づいて行われる伝統的な儀礼を総称して「祖先崇拝儀礼」とし、重箱の現状やそれらに対する県民の意識について探ることで、現代の沖縄における祖先崇拝儀礼の在り方を明らかにしている。



図1：沖縄の重箱
(桑江可奈子撮影 2017年5月)



図2：祖先崇拝儀礼の様子
(桑江可奈子撮影 2017年5月)

◎方法と考察

まず、重箱の現状を知るために、重箱を商品として取り扱っている県内の店舗に対して調査を行った。大手食料品店4社の重箱の販売の様子からは、季節商品としての重箱と、これまでの伝統的な重箱との明確な違いが明らかとなり、また、長年重箱を取り扱ってきた総合商店のオーナーに対して行ったインタビューからは、祖先崇拝儀礼に対する県民の意識や、県内の重箱需要がかつてと比べて減少している現状を窺い知ることができた。

さらに、重箱や祖先崇拝儀礼に対する県民の意識を明らかにするため、沖縄出身かつ現在も沖縄で生活している方を対象とし、アンケート調査とインタビュー調査を行った。この調査からは、

世代が若くなるにつれて、重箱や祖先崇拝儀礼に関する意識が薄弱なものとなっていることや、世代間に大きなギャップがある現状などが浮き彫りとなった。

◎結論

これらの調査から、重箱が現代人の味覚やライフスタイルと乖離するものとなってきており、そのギャップを埋めるため、重箱を外部から購入したり、現代的な食事で代替したりといった簡略化がなされ、さらに、伝統が消失したことによる重箱の定型化も生じている現状が明らかとなった。また、祖先崇拝儀礼において重箱を用いるという形式は今もなお継承されているものの、重箱の根底にある先祖崇拝の思想は世代が若くなるにつれて薄弱なものとなっており、高齢者層は家庭内の重箱に関して強い権限を持っていることが窺えた。

重箱は祖先崇拝儀礼を構成する要素の一つであるため、重箱に対して影響力を持つ高齢者層は、儀礼全体に対しても同様であると考えられる。また、重箱の簡略化に伴い、祖先崇拝儀礼自体も簡略化してきており、メジャーではない祖先崇拝儀礼は、簡略化はおろか日常のなかから省略されている現状が明らかとなった。

世代が若くなるにつれ、祖先崇拝儀礼に対する熱量も下がっているようであったが、若年層が祖先崇拝の思想を持ち合わせていないわけではない。若年層の祖先崇拝・祖先崇拝儀礼への熱量の低さは、それらに関する知識の少なさが起因していると考えられる。

未だ一定の需要がある重箱であるが、今後その需要が高まるとは考えにくい。時代に合わせた重箱のかたちを模索していくことで、重箱の未来は広がり、結果的に祖先崇拝儀礼の簡略化を抑えることにつながるだろう。

【主要参考文献】

- ・宮里朝光「琉球人の思想と宗教」『沖縄の宗教と民俗：窪徳忠先生沖縄調査二十年記念論文集』東京：第一書房、1988年
- ・渡口初美『渡口初美の琉球の家庭祭祀—年中行事・先祖供養・伝統料理—』沖縄：沖縄教育プロダクション、2013年
- ・田原美和、森山克子、東盛キヨ子、金城須美子「沖縄の清明祭の行事食の現状と伝承に関する一考察」『日本調理科学会誌』48巻1号、49-56頁
- ・呉知恩「祖先崇拝儀礼と女性の役割：韓国の一カトリック「教友村」を事例として」『京都社会学年報』第2巻、19-37頁